

仏教文化学試論

大谷大学
教 授 堅 田 修

近時における学問の世界の動向として注意されるのは、従来の学問の範疇に入らないような新たな学問が創出されてきていることである。例えば、エントロピー学会という耳新らしい学会が発足したという。これは、人間が住む地球において、科学の進歩や経済の進展にともなう様々な問題が惹起されている状況に対し、そうした地球全体を考え、様々な問題に対応しようとする新しい学問、というようである。これは最近の一例にすぎないが、いわれて久しい学際的研究をのりこえ、科学の総合化、新しい科学の創出が、とくに自然科学の面で著しくすすめられている。人文科学の面でも、例えば文化財学科とか、綜合文化学科などという学科が設置されている大学もあり、従来見られなかった学問が成立されつつあるといつてよい。

ところが大谷大学においては、すでに早く新制大学院発足時から、文学研究科の中に従来他に類例をみない専攻が設けられてきた。それは「仏教文化」という専攻であるが、しかし遺憾ながらこれが「仏教文化学」として、新しいユニークな総合的な学問として確立されているとはいえない。新しい学問が創出されつつある中で、改めて「仏教文化」を「学」として確立せしめるべく、いささかの試論を呈したい。

先ず、「仏教文化」とは何かということである。この用語は、しばしば耳目に接するところであるが、その意味するところにつ

いて、必ずしも明確にされていない。諸辞典類には、用語としてのせられてもいない。仏教系のいくつかの大学には、「仏教文化」の語を冠する研究所が設置されているが、この語の意味するところを明確にのべられていない。二、三の例をあげるに、「仏教を中心とする文化一般に関する研究」、あるいは、「仏教文化の総合的研究」、また「仏教文化一般についての学問的研究」等とあるのみである。しかし、その中に「仏教思想・仏教文化に関する研究」ともあり、「仏教文化」が仏教思想と対置して記されていることは、仏教文化の意味するところを暗示しているともいえる。

「仏教文化」の語に関連して気づかれるのは、「仏教文化史」の用語である。この語は、研究書の題名によくみられ、『仏教文化史研究』、『上代日本仏教文化史』、『日本仏教文化史研究』、『契丹仏教文化史考』等である。しかし、この仏教文化史というの、必ずしも明確ではない。この用語を冠した書としては、橋川正氏の『日本仏教文化史の研究』（大正一三年）が嚆矢をなすかと思われるが、この書では、仏教文化史を、「従来の教理史や教会史の研究とは少し趣を異にする」といっており、また、鷲尾順敬氏は、「日本の文化の歴史的發達は、仏教に関係するところが甚だ広く且つ深いので」、「その史実に注意して研究」するのであるとしている。他の仏教文化史を題とする各書は、仏教文化史ということについて、とくに論じていない。

このように、仏教文化、仏教文化史の語の意味づけが、明白に論じられていないということは、あえて論ぜずとも自明のことからであるとされているためかとも思われる。いま、仏教文化ということの一般的とみられるとらえ方を考えてみると、「仏教を土

壤として成された文化」、あるいは、「仏教によって、もたらされた文化現象」といった意味で使われているのでなからうか。それは具体的には、とくに仏教文学とか、仏教美術などをいうのでないかと思われる。そして、仏教文化史というのも、単純に、それから仏教文化の史的展開をあとづけ、考察するといった意味でとらえられ、その仏教文化の史的展開を考究する学として、歴史学をはじめとして、美術史学、文学、考古学、民俗学等の諸学があたりものと考えられているのでないか。前述した「仏教文化一般についての学問的研究」という表現も、おそらく、このような仏教文化のとらえ方にもとづくものと思われる。従って、「仏教の思想的研究」をすすめる学として仏教学が、そして、いわゆる仏教文化を研究する学として歴史学、また文学等が、背後に考えられているものと思われる。

しかし、先に述べた現在の科学の総合化という状況をふまえて、改めて考えてみると、仏教の思想的研究が、一般にいわれている仏教学、そして、いわゆる仏教文化の研究が、歴史学や文学によって行われているというあり方を再考する必要があるのではないか。仏教を、そしていわゆる仏教文化を究明する学として、従来の仏教学、歴史学、文学等が、それぞれ行うところまで十分であろうか。一体、仏教学という学問は、いかなる学問であろうか。近年、仏教についての書物が多く刊行されており、書店の仏教書コーナーは、まさに汗牛充棟もただならぬ有様である。これらの仏教書を見ると、仏教学の学問大系、理論と方法などについて記されているものは殆んどないといってよい。内容は、例えば、インド仏教(チベットを含む)、中国仏教、日本仏教と大別され、インド仏教の中で、原始仏教、アビダルマ仏教、中観仏教等に分け

て書かれているといった状況である。近時出刊された『仏教研究入門』においては、「総論」があつて、そこで仏教の研究を大きく分ければ、仏教全体の研究と、宗派仏教の研究の二つに分けられ、前者はいわゆる「仏教学」であり、後者は「宗学」であるという。そして、「仏教全体のアウトラインを掴むには、仏教の歴史的發展を理解する必要がある。これは仏教史の研究になる」としている。仏教全体の研究をするのが仏教学であり、仏教全体のアウトラインをつかむのが仏教史研究であるとする、仏教史研究は、仏教学の一分野としてなされるということになる。仏教史のなかには、前述のいわゆる仏教文化研究も入ることであろうから、仏教文化研究は仏教学の学問体系の中でなされることにもなる。

しかし、さらに考えてみなければならないのは、仏陀の教えが人々にうけ入れられ、信仰されていく状況は、いうまでもないことであるが、それぞれの民族の、それぞれの時代、社会、経済、政治のあり方によって様々であり、複雑である。従って、その把握には従来の歴史学や文学等の学によって、どれだけ明らかになりうるか問題である。とくに論ずるまでもなく、仏教は現代にも生きているわけであるから、現代に背を向けての仏教研究であつてはならない。前述の『仏教研究入門』において、「仏教学の大きな問題は、最近仏教学は盛んになったが、仏教はいっこうに明らかにならないという点にある」といって、これは仏教研究者の心構えの問題であるとしている。そして、仏教研究は教理や用語を機械的に扱わず、取扱う教理や術語の意味の理解に努力すべきであるとしている。仏教を研究する心構えとして、これは肝要なことであろうが、前述したとき現在の諸学の研究状況をふま

えて仏教研究を考えてみるべきとき、より広い視野に立つことが必要でないかと思われる。

より広い視野に立つことのひととして、仏教も文化の一部をなしていることを確認しておかねばならない。この場合の文化は、先に仏教文化といったときの文化、文学とか芸術等を主としていう文化ではなく、社会科学、文化人類学においていわれている文化である。現今、文化という言葉は、文化財、文化人等、多様に使われているが、社会科学においていわれている文化の概念は、知識・信念・芸術・道徳・法律・慣習などを始め、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力・習慣をすべて包含するところの複合的全体であるとされている。また、文化人類学では、ひとつの文化とは、ある一定の社会に存する習得された行動および行動の諸結果の総合形態であり、その構成要素が、その社会の成員によって共有され、かつ伝達されているものであるという。このような社会科学、文化人類学の文化の概念については、詳論する暇を持たないが、文化とよばれている現象の中には、政治・経済・法律・思想・言語・科学・芸術等、多種多様な人間のいとなみと、その成果が含まれているとされている。仏教も、そうした文化全体の一部をなしていることからすれば、仏教の把握も、文化人類学、文化社会学等の理論と方法をふまえてなされる必要があると思われる。

今日、例えば天文学は、さまざまな物理科学、電子工学、ロケット工学の総合的な地盤の上にしか成り立ち得ないだろうとされているのと同様に、仏教は教理学を基盤としながら、歴史学、

文学、社会科学、文化諸科学の総合の上においてなされる必要があろう。今日的な科学としての生命科学は、生物学の単なる一分科でなく、物理学、化学、医学、生理学などの先端的な成果の有機的総合の上に成立してきたものであるという。仏教教理のみでなく、仏陀の教えが諸民族の間に信仰され、各民族の政治、社会、経済、文学、美術等、様々な面に影響を与え、現今もなお信仰されている状況について、さらに未来の仏教を考える学を新たに樹立せしめるべきであらう。とくに今日、生命科学の進歩によって、新たな生命の発現・変換がすすめられつつあるとき、それにとりなつて人間精神のありようが深く考えられねばならない。それを考える精神科学を改めて確立する必要にせまられているといつてよい。このようなことがらにも対応しうる学として、「仏教文化学」が改めてうち立てられるべきだと思われる。

上述の如き総合文化学としての仏教文化学の方法を、いま直ちに明示しえないが、具体的に問題をとりあげ、諸学の有機的総合をすすめていくうちに何らかの手がかりがえられるのでなろうか。具体的な問題として、例えば生命科学の飛躍的発展にとりなつて問題となつている人間の生と死について考究を深めていくなどである。人間の生と死については、各民族それぞれに、また時代によって、それぞれの対応を示しており、仏教の信仰によってまた別の対応をしてきている。例えば、この生と死の問題をとりあげて論究するなかで、新たな「仏教文化学」の道筋が開かれてくるのではないかと考える。